

韞藏錄

六之七

和書門類			
二七二一九	九	一	九
號	函	架	冊
一	二	九	一
冊	架	函	號

內閣文庫			
二七二一九	九	一	九
號	冊	架	函
一	二	九	一
冊	架	函	號

內閣文庫	
番號	和 27219
冊數	12 (5)
函號	190 356



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



韞藏録卷之六

與稻葉正義書 十通

五月廿五日書 戊戌歲

對梅字立
菽原乙彦
藏于俳書
二百精舍

明治十二年藏

信古堂
藏書

去七日之世... 武井氏... 誠敬... 世上一回... 存心... 大牧... 迎... 徒... 同...

大牧... 迎... 徒... 同...

世東舍人及子孫初年及及後能人物言聖也
大東也其來及之因之基本出來也
功之長有といふる也

一織部公之及上侍中入夜只也此也亦新説也
二一也其來及之因之基本出來也
三其目也一也其來及之因之基本出來也
四其目也一也其來及之因之基本出來也
五其目也一也其來及之因之基本出來也
六其目也一也其來及之因之基本出來也
七其目也一也其來及之因之基本出來也
八其目也一也其來及之因之基本出來也
九其目也一也其來及之因之基本出來也
十其目也一也其來及之因之基本出來也
十一其目也一也其來及之因之基本出來也
十二其目也一也其來及之因之基本出來也
十三其目也一也其來及之因之基本出來也
十四其目也一也其來及之因之基本出來也
十五其目也一也其來及之因之基本出來也
十六其目也一也其來及之因之基本出來也
十七其目也一也其來及之因之基本出來也
十八其目也一也其來及之因之基本出來也
十九其目也一也其來及之因之基本出來也
二十其目也一也其來及之因之基本出來也

情也其書茂少也其來及之因之基本出來也
一其目也一也其來及之因之基本出來也
二其目也一也其來及之因之基本出來也
三其目也一也其來及之因之基本出來也
四其目也一也其來及之因之基本出來也
五其目也一也其來及之因之基本出來也
六其目也一也其來及之因之基本出來也
七其目也一也其來及之因之基本出來也
八其目也一也其來及之因之基本出來也
九其目也一也其來及之因之基本出來也
十其目也一也其來及之因之基本出來也
十一其目也一也其來及之因之基本出來也
十二其目也一也其來及之因之基本出來也
十三其目也一也其來及之因之基本出來也
十四其目也一也其來及之因之基本出來也
十五其目也一也其來及之因之基本出來也
十六其目也一也其來及之因之基本出來也
十七其目也一也其來及之因之基本出來也
十八其目也一也其來及之因之基本出來也
十九其目也一也其來及之因之基本出來也
二十其目也一也其來及之因之基本出來也

くしよの家の有る人などして女帝の御成をさす可く世
の目も夜やちの御も學力は所よりは後家のつぐぬ學士に
成程した人あり相見やち忠貞自分著教筆を以て又は
妄説甚也松葉作の新鮮に一足、葉を以て御の御書
一しよの御書を御書に御書に御書に

八月廿五日

松木重んん

此報

依直判

松木重んん
福来の書とハ傍に推返す事なく松子も高の事
竟然して二字も皆ゆつらんおれは書大元中書意

九月四日書

六月九日七月八月六月の状お達し母事ニ涉ぬり申
御免存御我之恙勝り今程を系丹治毎く御書の中書
茂おくてもくは口控六士ニ事しと合点之を以て
たぐ松成なるも是くとは合点之程来離ち又之
うくレウのしやちの御書ニツト思惟ノサレハソコハナトゴサ
ロウトヤ中は是る屈ハ法花ニうま一葉用くは茂合点
とくしはたも老角多人の御書長中ノ氣よとくし
らおぬ意のめしとくしハ強急を御書に御書に
論ハ書しハ常式之しハちりハとくしハ御書に御書に
あくと定夕飯と程来しとくしハ御書に御書に
でいきしとくしハされはとくしハ御書に御書に
の自然ありとくしハ御書に御書に御書に御書に

ふか私也^のい^の信^のラ^のめ^のり^のと^のい^の思^の答^のあり^の二^の先^の生^の信^の
學の意^の誠^の中^のの^の氣^のの^の誦^の了^のい^のる^のり^のヤ^の秘^のの^の受^の
儒^のし^の凡^のニ^のカ^のカ^の又^のト^の云^のレ^の又^の何^のの^のあり^のと^のハ^のア^のレ^のバ^のコ^のナ^のモ^のハ^のキ^のト^のナ
イ^のハ^のツ^のト^のミ^のカ^のハ^の養^の子^の遺^の訓^のモ^の念^の息^のユ^のカ^の思^の也^のと^の云^のレ^のハ^の抄^の録^の
也^のと^の云^のレ^のキ^のハ^の見^の不^の也^のと^の云^のレ^のキ^のハ^の是^の大^の笑^のと^の云^のレ^の
キ^のハ^の己^の身^のを^のと^のら^のぶ^のと^の云^のレ^のキ^のハ^の學^の士^のと^の云^のレ^のキ^のハ^の是^のら^の也^のと^の云^のレ^の
キ^のハ^のめ^のり^のハ^の若^の乎^のと^の云^のレ^のキ^のハ^の友^の部^の赤^の井^の山^の中^のの^の類^の也^の
別^の衣^の不^の遠^の矣^のと^の云^のレ^のキ^のハ^の把^の捉^の不^の定^のと^の云^のレ^のキ^のハ^の批^の波^の並^のレ^の也^のと^の云^のレ^の
キ^のハ^の把^の捉^の不^の定^のハ^のそ^のこ^のり^の又^の仁^のに^のレ^のマ^のと^の云^のレ^のキ^のハ^の一^の途^のに^の在^のる^のと^の云^のレ^の
キ^のハ^の不^の仁^のと^の云^のレ^のキ^のハ^の也^のと^の云^のレ^のキ^のハ^の天^の的^の切^のと^の云^のレ^のキ^のハ^の遺^のレ^の也^の
と^の云^のレ^のキ^のハ^のカ^のス^のク^のニ^の放^の心^の之^のヤ^のル^のハ^のツ^のラ^のリ^のト^のモ^のナ^のイ^の意^のと^の云^のレ^のキ^のハ^のガ^のス^のク^のニ^の放^の
キ^のハ^のり^のち^のつ^の凡^のト^のリ^のハ^のナ^のイ^のと^の云^のレ^のキ^のハ^の心^のの^の也^のと^の云^のレ^のキ^のハ^の甚^の難^の也^のと^の云^のレ^の

テ

一 今月中旬比長治に余の妻の尾別に余十月末ノ望月
上旬に江戸に海一の中ハ表根の本曾孫三ノ所祖ノ不と
花御余は兆ノ立奇リ長途の休息故に之ニ有 家老
用人役人亦ノ本亦七日に長壽句と云 故に留八月亦三
波送留作沙龍乞親切と云 余は法花と波に長治に後
先ハ花御余ハ系孫後留事云 丹治孫介達者合波
与兄ハヤハ

一 男子後氣象能氣に入中ハ貧困笑止ハ海にいとそ
り留る有 妻ハ表根の事杯ノ談ハ長治に在 系也
由ハ率一平皆明しと在 系也 世中度ハ一平也 本年
正ノ元ハ江戸海ノ時 同ノ元也 与中 並ハ長治に可

中取との事

九月四日

依直判

九月十日

市報

於以職初及八九為及一借中入成中置はは於入小學
世中少科お見跡岐不少由舍人及は成置指に於入由
は人々文字に力附る者ハ人数に成二つと存は如何
養元痛氣に免免東の早免の中にとと免免不
ゆは流りて免の痛氣と存如何

九月十七日書

八月亦六日、少状お違は免の少初に也跡年為の書
學暫成ゆは跡岐不少何年及業免の免と存は職

初及八九為及はは少一の免ゆは初亦事や恙波在象
内にも十日斗に逗留と存は不空後後大有一
幣別長崎に罷職に相定ゆ丹治に切、余會洛中印毎
同遊學論發大方一致にあり中免武に十
六士に丹治中可象ゆ神説ハ能合忘言ゆ也神
旧習もゆゆ免ハ漸く改て中存ゆ免角を人よて
大學補傳と藩之度との事、中免ゆ免免今一
どこぞ藩之度との事、中免窮の之免來復一年に戸に
免免越ゆ免に中ゆ免自分は上り、時因及の來免と
中るゆ一平發大抵るゆ免免人ありゆ免免免中
中免るゆ免ゆ丹治痛氣ハ全岐に免一ゆ免免とこ
免免にゆ免免ゆ

一古依之丹之節死去之宅九之節發痼病あり死去
 一人丸之北の惜し人矣山為道し孝とヤリし
 一籍別之合田元水占中一儒士曰四十六士或俗人丸の
 何角云ハ不足論矣如安正ノ大儒ガ忠臣義士ノ論あり
 安政くアレニ何ノマキレルヤ主君ガ大ダワある罷入
 殺されぬれ小タレ工ヘカレ故と云る事ヤおとく占中
 時長くも中ハ此ハ取ル禁識なくテ毛理コラカラ
 又ノハ振言あ類也
 一以戸禁幣安め起し比リ中來山名去深川名地起し
 另檢ニ羣集二本逆りし人も余説あり世ハサマく此
 心中來山危角カ一くあり録ハ穀ツブ一みて此能く
 此言始てあり也必此洋々

九月十七日

依直判

浪十帖

少報

粒以安正養子養安為多中ハ小林も大酒言クわむラ云
 此相とありて有レハ程来ハ孝と云ふは口惜神武以來
 昔言人ノ事ハハ大極中ハタテも是程ノ場ノ事ハハ
 中世ノカハありてあり者ありヤ桂ハ一ノ世ツキナラハ
 ト云ハ味も心ハありてあり者ありヤ桂ハ一ノ世ツキナラハ
 世ノカハありてあり者ありヤ桂ハ一ノ世ツキナラハ
 希ニ格致知ラ大學定和ノ事ニシタハ宣ハ裁ハ王臣ノタワ
 ケヨリ知レタ可思不類生ラノ病者ナリハモタワケノ一端ハ
 己カラ推ノ行ケハラサニタマレヌニ成中ハ萬國ニ積レタワケ
 世上殺多
 其日廢改多味ヲ知ラ人ニ此ハ却ラワケ名

ヲ友ルニ可慎之云云
ヒタト道理の如く
孔子ノ子貢トハ

十月十一日書

久便之在
老比返出
お京都丹治切
病余海使
之先
批書
雖ニ兆
論
何里
秋一
之能
予
依京都
ウツヤ
有
固心
甲
系
一七
歎

秋一
之能
予
依京都
ウツヤ
有
固心
甲
系
一七
歎

少老不立書狀世不中危角乃理之山見不心之極之世不中中
之之朱子之為學心與理而已矣ノ流ラ流身首ニウケテ多クク
ノニホウのノ書狀ヒ子リマフス毎用骨折云世石山中武書皆也
ん系の抄系ノ書也世不危化少書多ク見テタワムシ

書並ていば是るるも別紙乃
人の世の〜とあらるるなり

流るる〜とおもつは世の人なり
急〜とあらるる海邊あり

お〜と記するあり我ホる東月十八日比尾洲に罷候申月

初尾洲罷立に元ト下り可中と申末ノ落念去
先年〜通ル丹治を危角京に終りし
進メ申上明〜年と又上才に罷候中〜好湯武
論〜書彼是書有〜と許は書度
武多清と病者〜何に庭に丹治方可有頼の石
事〜是其再會公候可〜と極極云

十月十一日候
冷本十九建候
伏見御殿に
判

静庵集説を京都二條風月と申すに中屋
〜と申すも可有〜代と方々申下候
〜と申すも可有〜二十日〜と京に内海あり

一 米春若之長崎... 宿願... 網... 用...

十二月十七日

決直判

心義松坡

松山宿後... 平生... 友... 中... 先...

正月五日書 己亥歲

云... 十... 日... 相... 年... 初... 外... 法... 年... 武井氏...

一武井渡辺五人毎に書出布の事と云ふ

是の事一は一は好む

一七右玄厚子事一と出信りし道思派清智旧
を十七日今編相掛し尚去りて大學初
等と云

一之宅母以成云々中々余也成能湯武論し
以後勉學子意ハツキリトイフ之殊重好ハ四十六七
斗ニシテ云々云々云々一版一巻ハ卒音女正安後ノ
先入り好ハ友新赤井山中等一信學子事ハ也
此の事能公也一云々云々論ハ一紙ハ村田
與玄坊撰り云々云々者と云々學者ニヤトテ
遠方ト系ハ版若く交ねハ先角目利ハ云々

一之表學勢進也殊快此事一ハ何年學子意合
忘ハ人出来之云々一好ハ大炊以保即近局云々
成ハ版也了云々云々一海ノ進云々法ハ云々
好ハ云々法ハ同感入一ハ批書相達ハ云々
いハ一取度ハ先角朝笑乃ク死テ矣公也云々
信人ハ云々歩百歩形角ト一中一ハグツク云々
中者ハ云々小杉及云々同形ハ云々好ハ何モカモ
可學子ハ能場明ハ事一ハ人ハ一日ト進ハ一ハ
苦ハ不進ハ云々云々云々一曰易ト云々云々
云々ハ云々云々事ハ出テ徳ハ云々云々
年勤學一ト目ノ云々期ハ云々云々
ハ云々云々討討一ト一北度ハ云々云々目

ゴミラ法取棄り〜と好い

一云年上の方に来方と遊歴あり波尾考公此
今人々尚然と見入又ト好い依も是か公志
仍ぬいふ事と好い事山夜有〜ん皆〜た
けと好いおや母好人〜之字〜戒〜か〜ん〜後
物考〜ひや人事〜勤〜年と取〜鼻〜す
夜〜事〜母〜苦〜世〜ふいかコト共教多者

一云カ法南地教度〜夫火さ〜く〜か〜上
居位〜花〜人〜と有〜ひ〜今〜ん〜
去中柳糸迎〜居宅調〜窮〜中〜ん〜南
年七十〜及〜法方〜片居〜信法示相止

書通〜返中我十二七八相〜用事〜收〜他宅
女〜〜〜〜好い今去七十〜及〜親類
才目〜度〜中〜年教〜目
度事〜〜〜好い〜〜〜とよ
み〜玄厚七本〜為見〜書有〜

かく〜と〜と〜ひ〜と〜と〜と〜と

き〜七十の去〜り〜お〜好

友〜り〜千代とやい〜七十の

命〜〜〜の去〜り〜お〜と

右〜席〜尾利織田氏秋本同齒〜ら〜友〜み〜
き〜

と〜ろ〜と〜ふ〜七〜十〜は〜〜と〜れ〜日〜の

少くも人々を以て松ふりまゝに
又云わ中松柏の後彫れ意致

老れ山又く余のありし松の

色之ぬき人々人々を以て松の

のちをいふぬ考の身よりと事なを死

世ふまゝしるまゝいふ月あつるるん

是の静坐進流の清濁の勝るる

今叔父象能學友の書に好むは二行の彼

見し書にありし了るる危南目くさしる斗く

望むは若れ進流の神ありし回浦の聖賢く

書と読トテ百二十九人ハト口ボウニテ世と終

中事ト古今應トニテ終るる紀少くは再會七次

才に連高ヤル友補の益ヲ得而るるは月事ニては
り書状をヤリ寄友の忠懐得る

孟春五日夜

佐藤多庵判

陰平子多庵判

杉以山杉屋に一傳中人友の友塚の小屋を親懐若

く友塚の八右衛門友長之岡屋の友をとなむ千外當悉し

流況トウキョウ親令々紙ハ半表皆取るりし事一と形

而るる子新文子と斗るるとやうくやに志者堂

之數人る已言サテモサレシキ事ハ四段の増山友

美ハキトニタル下如事ヤル武之岡病方ありし事

二精心中のいこと

先の書状をヤリ相初め武七右子りしことす方

上書尺二の中村田之巻関氏美生河部の中法生
又生三秦之安正流儀中之初学
之物致い事し中の中少家の不系の事い事し
以自今以後人し以月初肝愛の中度事い事し
二の以舟人多多泥の中者ハ存之我久の中以書状
往之長久之為致助の彩妻く少祝儀与少祝の一本
至二の宜買しし

正月十八日書

年如く少状五巻の事い事し少の事い事し
我少事い事し其病音殿い快当妻平生い通に
先日の少状中の相而或去冬も少状建の中少而
少或の同自い事書成仕与る長く少而少

一織戸及少手物い少状不置少礼彩海い重白通書
一丹治少く別書意い病家く宛末い安心元い存家
一借地大才お調い柳原色い仕事道い花掛少い

と少先り中些少心氣背滞い忘と海い我未幾十こ
七八枚中念メ今少く除命送り了度与海い斗い奥与
大丈及少状少状の示少り礼入少批方存齊少治
少る少少幾返書い送引ては候は少礼海い同目書讀
少格別少少少少自面談中度少今少く除命と少
意少望少少少少少少少少少少少少少少少少
先ハ老妻い一端与海いハ在無及い少少少少少少

の系年事一平子、洋南麦、終年出、は表
度、夫大世、世、終、年、下、好、村、田、系
コト、花、人、中、の、終、年、出、は、表、
比日、深、知、つ、人、事、一、向、子、九、七、歳、は、方、は、
系、終、年、出、は、表、
三子、年、事、一、平、子、
一、比、日、古、歌、と、存、留、

い、つ、く、に、身、は、世、中、一、身、の、体、也
世、終、年、出、は、表、
我、号、和、平、
い、つ、く、に、身、は、世、中、一、身、の、体、也
世、終、年、出、は、表、

於、年、事、一、平、子、
二月十七日

終、十、候、後

依、直、判

有、く、友、終、年、出、は、表、
終、年、出、は、表、
終、年、出、は、表、
終、年、出、は、表、
終、年、出、は、表、
終、年、出、は、表、
終、年、出、は、表、
終、年、出、は、表、
終、年、出、は、表、
終、年、出、は、表、

三月十二日書

二月廿九日、終、年、出、は、表、
終、年、出、は、表、
終、年、出、は、表、
終、年、出、は、表、
終、年、出、は、表、
終、年、出、は、表、
終、年、出、は、表、
終、年、出、は、表、
終、年、出、は、表、
終、年、出、は、表、

之善多者柳系其尾則北河目多涉少確中庭卷
自備化少卷作多十七八卷中も尚月未月月初
之之内彩笔の引移るも之完冊次病元杖大方
尚月と色市後屋列多の年は中の上方大々少
法有の實多も之白元存之程も善法也私の有
之相傳多の

一 大炊師探之涉方引也善法探使も亦存尚年
涉之廣も中世字完之成涉進多私も亦取古動解
中廣多も亦成の
一 批回永井也氏石純海會文字も亦少も相見
一 卷中正圓多の私書法も亦出也法程私涉も入

涉申達於海川私之也上法付也末も江戸に集り私
相少も之の引も一と海川
一 書子大毎度涉傳云も亦力也亦也道中包交も亦事
も依考八讀書後不絶初も亦公事面會も亦忠信海之
三月十二日
依後大前也判

治本十九卷の報

後唐津廣も涉状相達も亦也
大炊師探之涉傳云も亦力也亦也道中包交も亦事
も依考八讀書後不絶初も亦公事面會も亦忠信海之
隨も亦依涉之も善法探使も亦存尚年
物一院も織存も私小織之善法探使も亦存尚年
引移中も善法探使も亦存尚年

五言古詩一首

信安公

信安公

信安公... 五言古詩一首... 信安公... 五言古詩一首...

信安公

信安公... 五言古詩一首... 信安公... 五言古詩一首...

信安是己亥
春所于于唐
津脱簡

一冊度... 二文... 神... 中... 人... 又... 六... 論... 成... 中... 以... 其... 唱... 月...

唯一節之法精刀法保卷之樹而已法心身之
 志之由我采柔之故不之語談不足少之入井川
 誠之事非如外族見之之夫齒子之來之施宗
 筆少之の兼書之法實見之之の

遺告

書置費

一 拙之死去之筋瓶入何方ニ淑大森地ニナキ尺短
 小石と重石と書付セヤ何れニ書付不若墓不之
 仕也儀兼用之書子ニ付至ハ勿論碑銘亦儀
 兼用之事ニハ
 一 何方ニ兼備金之器物等致之重キ外證人ニ合
 一 事一切不仕重ハ
 一 同氏共八幼少何レノ費煩成有レ同浦ハ卷長子

入地法ハ何レノ作事ノ多ク我長ノ遺學又書初ハ種
 一 事ハ兼備金之器物等致之重キ外證人ニ合
 一 事一切不仕重ハ
 一 同氏共八幼少何レノ費煩成有レ同浦ハ卷長子
 一 南ノ官由少ノ代金有之何レノ事ハ中ノ事ハ
 一 右ノ條中何レノ為書付之儀有レ以外ニ更ニ
 一 何レノ事ハ

享保元年書月

兼五中候

佐右衛門兼直方利

上封、豊后中松

佐伯寄書

書書に世書有平里心書
世書ありし頃の
本意画

魯西狩獲麟

うらりへー滞し心ちをしは
家日のなかりかもししもつね
侍らん人へかきこしたるのり
少代中ちるつらとをきつた
諸生しは活きあひ感慨のあり
己亥八月朔日

行々年々おん海らん家
種 沙海とあしり
の海ふとあしり
信じて老るいし

去してゆきらん奉りきり

大橋少くは食のよき

後れ世をいづらむとまじ
露のうらみれぬまじ

戊戌歳且

義士つとむるの心

山登りこつての心

世成らぬ身もなほ

木若くしてよき

木若くしてよき

木若くしてよき

すきなすくすくも都らぶり
古里志しよ人のあはれ
心友れまきるふら
ねあはのほに月より友あり
よーにりりぬ人あまーり
ら風ほあすにけり清りし
ゆも人あ批ときあの
あまーらあまもせん
いさひさひさひさの母あ
世の中き風ー本家のし
あまかあまあまあま

題 福 禄 壽

今くひこ輝まきとたなら
おはるあるあまあまら
あまはくらあまあまら
あまあまあまあまら
世の中あまあまあまら
今くあまあまあまら
あまあまあまあまら
あまあまあまあまら

亦見菽野氏擔當雜誌恐非先生

與 跡 部 氏

補傳しき書月一浚は小居教究理ノ意ヨリ
ゆも成極母也當世海義ノ意也

儀平即
尚奇

韞藏録卷之六

拾物致知斗りノ意義ヲ解タル事トハ
本元意ヲ一ノ度モノニテハ平亮ハ善思入
思ハ思ハ中ニアレルハ色介ニアラハ
ラ大切ハ思ハ思ハ思ハ思ハ思ハ思ハ
補傳海文ハ善思ハ思ハ思ハ思ハ思ハ
世伝一同ハ大患違恨ハ思ハ思ハ思ハ
宗初同拾物補文ハ思ハ思ハ思ハ思ハ
思ハ思ハ思ハ思ハ思ハ思ハ思ハ思ハ

韞藏録卷之七

志の宛

いふ一乃聖の御代カ改せも
そふもをををををををををををを
こころなり一尺のき衣冠より馬車
に随ち用ひよる事ハ事ハ事ハ事ハ事
戒すも竹の杖杖の杖杖の杖杖の杖杖
屋けの事思ひおろそか思ひおろそか
しそ伝書

○世乃人の心まを思ひたる色物ハ
るあるもの系よ思ひかどハり思ひ
あるに思ひ

く夜蒙ふに紙おきもありかきうえかすぬめひひ
ハ心と紙の起るるえのたうり

○おあし心かきん人と志先やたにお波してた
起るる世のちのかきりきりうくしひかきま
んこうえうきしきりまにさふくまきしきり
かきんともむひひおらんかあり地やせん互いに
かとのことをおあふと起るかひあるえのめ
かたがふあらん人こ我我ハもやあふあとのひ
おくみさるうきとえうりきりしきりかき
かめとあどあふハまおうりきりきりきり
しきりしきんハ大しきりかきりきり
かとしきりあふあふあふの心よともおハま
あふあふ

たふふのあふのあふとびよまや

ふ世の二位せうとに良覚僧正とあふ

あふ人からあり坊のうにふある様有りき人
構本れ僧正とあふいしきりあふりあふ
をまのまきりき根のまきりきりあふりあふ
りいふ腹あふり切くめを塔建てりあふり
ふすあふ塔あり有けり、塔池の僧正とあふいし
象

龜山殿の仏堂よ大井川のあをまりせふんて大

舟の七氏よ舟と氷車を作せしきりあふりあふ
流るる教目よいあふりあふりあふりあふり
りくあふりあふりあふりあふりあふりあふり
てすりあふりあふりあふりあふりあふりあふり

...の...に...りて...
...を...に...り...
...の...を...
...の...を...
...の...を...

○人の...にて...
...の...を...
...の...を...
...の...を...

○世に...
...の...を...
...の...を...
...の...を...
...の...を...

...の...に...
...の...を...
...の...を...
...の...を...
...の...を...
...の...を...
...の...を...
...の...を...
...の...を...
...の...を...

論ありきしるは人の魂ありてい
ふに海にぬかししはもろくもくさむ
ありしつる物はを珍しきものま
んちりいよふはいたまの人のた
くものをもとに人をおありと
はるすやちる人といふはるを
さあききむはむのいのちの
くえん公若市の慶おもとむと
人ふまはむは海なるのいのち
ふあはる人たりたむしも物
一夜ハ終ふものとさるるを
まはる後矢やむはるはるはる

中よあまはるしはむすしむすし
わらわらむ人ふまはるのい
ふやのいのちのいのちといふ
むすむすしむすしむすしむすし
むすむすしむすしむすしむすし
むすむすしむすしむすしむすし
むすむすしむすしむすしむすし
むすむすしむすしむすしむすし
むすむすしむすしむすしむすし
むすむすしむすしむすしむすし
むすむすしむすしむすしむすし
むすむすしむすしむすしむすし

れしいらしむれは毎に御まじりて
さうもいふしとるまじりてさう
さうもいふしとるまじりてさう
さうもいふしとるまじりてさう
さうもいふしとるまじりてさう

○人の心直あるは徳の徳を
まじりてさうもいふしとるまじりて
さうもいふしとるまじりてさう
さうもいふしとるまじりてさう
さうもいふしとるまじりてさう
さうもいふしとるまじりてさう
さうもいふしとるまじりてさう
さうもいふしとるまじりてさう
さうもいふしとるまじりてさう
さうもいふしとるまじりてさう

徳さへいふしとるまじりてさう
さうもいふしとるまじりてさう
さうもいふしとるまじりてさう
さうもいふしとるまじりてさう
さうもいふしとるまじりてさう
さうもいふしとるまじりてさう
さうもいふしとるまじりてさう
さうもいふしとるまじりてさう
さうもいふしとるまじりてさう
さうもいふしとるまじりてさう

○あつと人号射を中ひありては
さうもいふしとるまじりてさう
さうもいふしとるまじりてさう
さうもいふしとるまじりてさう
さうもいふしとるまじりてさう
さうもいふしとるまじりてさう
さうもいふしとるまじりてさう
さうもいふしとるまじりてさう
さうもいふしとるまじりてさう
さうもいふしとるまじりてさう

ゆづり事なり

○双乃土ふいひく^{テカテ}の^{テカテ}は
ゆづり事なりゆづり事なりゆづり事なり
ゆづり事なりゆづり事なりゆづり事なり
ゆづり事なりゆづり事なりゆづり事なり
ゆづり事なりゆづり事なりゆづり事なり
ゆづり事なりゆづり事なりゆづり事なり
ゆづり事なりゆづり事なりゆづり事なり
ゆづり事なりゆづり事なりゆづり事なり

○寺院の号ありぬるゆづり事なりゆづり事なり
教事じり人のまじりゆづり事なりゆづり事なり
有の屋はななりゆづり事なりゆづり事なり
らんゆづり事なりゆづり事なりゆづり事なり
笑ゆづり事なりゆづり事なりゆづり事なり

ゆづり事なりゆづり事なりゆづり事なり
ゆづり事なりゆづり事なりゆづり事なり
ゆづり事なりゆづり事なりゆづり事なり
ゆづり事なりゆづり事なりゆづり事なり

○唐の物を茶なりゆづり事なりゆづり事なり
書ゆづり事なりゆづり事なりゆづり事なり
ゆづり事なりゆづり事なりゆづり事なり
ゆづり事なりゆづり事なりゆづり事なり
ゆづり事なりゆづり事なりゆづり事なり
ゆづり事なりゆづり事なりゆづり事なり
ゆづり事なりゆづり事なりゆづり事なり
ゆづり事なりゆづり事なりゆづり事なり

○ゆづり事なりゆづり事なりゆづり事なり
ゆづり事なりゆづり事なりゆづり事なり
ゆづり事なりゆづり事なりゆづり事なり
ゆづり事なりゆづり事なりゆづり事なり

やじとと堪ひてあそびする身
らまらうのいほくさくさくは思ふ
人の身よやじ事ねえはし
第一小食お中二よきお中三よ居下れり
人百の大事此小もるに飢ひをわき風急
おさき候してまうふまうは楽に但人
皆病ら痛じたさきぬれとも悲あひり
醫療と定らぬし茶とくにて口のと味えは
こうとまうし無印の付たかとおりとし此
アリの外と味えいあじと肴しと口の味候約
あしたまきの人あまじせん
○かしとあまの人も人のくこのちかりと

己まかばしとせりあう我としはひそ
卯は知るともあまうりあ屋うふにまは
こぞしおととのしきぬあふ屋し
かこう見ふくくまことしはひあうの
とろうねえはは病ちの性れととも
らも身其あふぬとともは年の
まぬとともは病のよかともと
らともたのよきまともとともはあ
のひともはあまの身けくとの
非とともはあまの身けくとの
しともまうりは済しと中平
うまうまはあまのまはぬる

ゆくゆくも何れかありたれど
いふこともないまはらふは
よむくもつらいつまふは
しるふもいふやうにして
あはれはなれぬふもいふや
くせもいふはなれぬふも
あはれはなれぬふもいふ
あはれはなれぬふもいふ
あはれはなれぬふもいふ
あはれはなれぬふもいふ
あはれはなれぬふもいふ
あはれはなれぬふもいふ
あはれはなれぬふもいふ
あはれはなれぬふもいふ

並いひつらんや及もつれり
事成れぬとまはらふは
れくは媚るらんのあるは
あはれはなれぬふもいふ
あはれはなれぬふもいふ
あはれはなれぬふもいふ
あはれはなれぬふもいふ
あはれはなれぬふもいふ
あはれはなれぬふもいふ
あはれはなれぬふもいふ
あはれはなれぬふもいふ

○心れしむらんや及もつれり
ふもいひつらんや及もつれり
あはれはなれぬふもいふ
あはれはなれぬふもいふ
あはれはなれぬふもいふ
あはれはなれぬふもいふ
あはれはなれぬふもいふ
あはれはなれぬふもいふ
あはれはなれぬふもいふ
あはれはなれぬふもいふ
あはれはなれぬふもいふ
あはれはなれぬふもいふ
あはれはなれぬふもいふ
あはれはなれぬふもいふ
あはれはなれぬふもいふ

思ひあつてくれと申しひきうしはしあつた
厚き事あるの恩也道あるで八の
子の心は慈恵有る人や孝養の心を
よめし子孫を親の志し思ひ知る
あれ世に推多し人の業づきするす
るがあらうしあつた人
美し厚きしひ望し見えて下
思ひくさるゝわことあり其人の心は
里て思ひし親の心もよき
事ありしよは八の心を忘れ望し
事しやうし望し人知しあつた事
をありし望し人し世に人の心は

く思中し世を八の心はあつた人
産あり時八の心はあつた人
すし凍餒の苦にあつた料の者た
人を苦し先法を犯し免事持事を
不便は上は考り貴先不をや免民を
先は不利ありん事類ひ有るは衣食
よめし利ありし事世に人を我は
此盗人とはし望し

○為業大納言入道石とて我とて
みて六波羅へあつたは貸物に一條
子て是をえ事あつた世に

思ひおろし〜我あ〜るは〜はれ也於しを
まきあむ世人東の門の面合りせ〜まきあけ
か〜る者ともよ集り居たち。自ら是も神ちあ
り〜うち〜り〜とい〜と〜るに〜あ〜り
思ふ事とる〜たぐひあき〜せとの之を意を
るに本意りや思ひ〜くまらるる居らるるに
其無つきて尺よ〜し胸せ〜覚り是ハた〜は
小め〜〜〜思おき志を思ひて〜り〜後
い万極よと〜よ〜て〜と〜中〜曲を〜つら
免て目を飲〜せつ〜彼れ支離をよを免
り〜と〜思か〜る〜れ〜し〜まきあむ
みか〜る〜ま〜き〜り〜た〜有思居る事也

○ 第とあるは物〜後樂冠〜これハ言とそん
思ふ思成〜は酒と相ひ〜と名はは權
らん事と道よ〜必事よ〜あ〜り〜あ〜り
のき〜と〜あ〜る〜あ〜り〜あ〜り
と〜る〜は〜あ〜く〜あ〜の〜又〜し〜ゆ〜り〜り
多事此相と改る事〜有りよ〜今〜は〜又〜し〜り
さ〜〜あ〜〜は〜あ〜り〜あ〜り
○ 世の人あひ〜あ〜り〜あ〜り〜あ〜り
有り〜あ〜り〜あ〜り〜あ〜り〜あ〜り
浮流人の足眼自然の〜免〜あ〜り〜あ〜り
是代〜あ〜り〜あ〜り〜あ〜り〜あ〜り
あ〜り〜あ〜り

○年寄の一人一筆でもなれば能く衆人の
 もを誰か一人のせいにするべきものなるに
 いけるものばからぬかききやわきでそれい
 きよめり新れあつて一生びるものそれな
 らぬかききやわきでそれいひるものな
 べりなれりき利しきもさういひりつを
 だりりたものわきもわきわきしづいて
 主有ぬ屋しきさういひるものなれぬ
 いひるもの様もさういひるものなれぬ
 ましてあはぬものさういひるものなれぬ
 屋もわき一人のせいにするべきものなるに
 思ひあはぬものさういひるものなれぬ

○貝をかりし人の我まあるをいひてはを
 て人の袖のうしろにひそめておき置かば
 又おなじきものありし人をもおなじ
 とはんがしつゝおなじありやうあるに
 あり其本盤しつゝおなじをさういひ
 かに石をももつゝおなじをさういひ
 うらんとつゝおなじをさういひつた
 取石むいたのまのあはれもあはれ
 そとをむきつゝおなじ清敏やうに好
 ておれをもつゝおなじ女をたもつゝ
 やけんしつゝおなじをさういひつた
 こゝろあはれは遠くをたもつゝおなじ

いほよあかり深がしー病を神美にしーあひん急なる
 人し露女にしーあひん急なる
 夢を不さー道を行しーせし其比しきしけり見えし
 ちしめし

○胡按書時教の母に松下禅尼とせし守をうま
 ちしめしきしきしきしきたるあやみ障子の障をけ
 在障をせしけりかー切まーしきしきしきし
 せししは城女義孝の母は日よしきしきしきしきし
 てしきしきしきしきしきしきしきしきしきし
 者よしきしきしきしきしきしきしきしきしきし
 倚しきしきしきしきしきしきしきしきしきし
 とぬんになるかにしきしきしきしきしきしきしきし

くらしきしきしきしきしきしきしきしきしきし
 しきしきしきしきしきしきしきしきしきしきし
 てしきしきしきしきしきしきしきしきしきし
 しきしきしきしきしきしきしきしきしきしきし
 なるしきしきしきしきしきしきしきしきしきし

○或の子は法師あしきしきしきしきしきしきしきし
 けしきしきしきしきしきしきしきしきしきし
 けしきしきしきしきしきしきしきしきしきし
 見えしきしきしきしきしきしきしきしきしきし
 ましきしきしきしきしきしきしきしきしきしきし
 だしきしきしきしきしきしきしきしきしきしきし
 ありしきしきしきしきしきしきしきしきしきしきし
 ありしきしきしきしきしきしきしきしきしきしきし

へまことはいや心くらり一日もふるは海邊
るふひつるふハ似び一まれしちかかくのどし
一生れにわづこ又しりあを惹て乃あし
こふ多ぐひりくと思婦みおれ何うたがけぬ
るもわればいふく物ハ定知かし不定と
心持ぬるのこすもふ多あがりぬ

○美乃事終たのむ庵かぬおれうある人
をぬりく物とれびしゆりしりこいなる
まいたおひ有とそれそ庵かぬこも此の
すけろろぶ財多しとしてれびしりし時の
矢やあしやとそれび庵かぬ孔子も時ふ
何りば徳何とそれそべかぬ衆回も不幸

ありき君れ家せもれび庵かぬ珠とる
らるるのささう庵かぬ奴あしりとしてれ
庵かぬとそれましりるる人乃心ざりせ
れむべしす必を變す物せもれそ庵かぬ
懐何ふるさしり身せも人れもれかたば
あめぬいさるこひ此あめ時ハうこ次左右を
れれれれれれれれれれれれれれれれれれ
せも此時を割げらるるれれ用事事を
こしまふしきびしきぬいおふさかひあ
らせひて何ふるゆりしりやさしりあめ時
一毛損せぬ人等天地の靈あり天地ハあ
るこころあり人の性あんげたとわん寛

大い—てきり—する時は、我怒見みさつ
き—く物のあつり—はけ—らだ

○[○]ある家におきざらあり人心のま—り
入ある事かしあるドおまふ—はけ人
みだにふ立入机ぬくろ—やうの物も人けふ
せくれ福ば不えがふ入ま—はけんどのよ
い—うぬか—ちもあ—ちやぬ—又か—みふ
龜形イロカキチおまゆえふとるけのげありて移る
かえふ小龜のあらあ—ち—うけ—げ—こ
虚—うもと—る我ふか心—念くれん—と
ま—りあり—ま—心—ま—の—あぢあやあ
ふん心ぬ—あ—ま—ま—む福志—ち—り

そこぎくは、い—は—き—し—ち—

○[○]ご—の—あ—り—逆—お—は—り—の—り—は—り—
小苦樂のあつり—樂—は—の—愛—ま—事
也、お—ら—し—り—ち—やむ—樂—する
一—小—谷也、小—種—を—と—た—る—の—不—ま
也、二—小—龜—三—母—の—味—あり—を—の—の—福—は—こ
小—も—あ—る—は—顛—倒—の—相—、利—お—こ—り—と—こ—む
く—り—り—ら—ひ—も—ち—と—め—る—ふ—あ—る—

兼、法師、老佛者、流而所作、徒焚、冊亦
卑陋、不正之書也、世人、往往、崇尚之、處
之、論盍之、次焉、何其、謬哉、然其間、終有
足以為、庸俗之、訓戒者、今摘出、為一冊、

覽者思之負享乙丑之夏佐藤直一方
書

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

松光日記

新古今集

つらぬりおりよりしはさ萩

我つまあぬほなかさ福

おとこふくだみ色小娘あふいと罪おり支わぶ
あちりすして女のす紀たもすんを申くし
べきめくあきりさふふししとぶあ女れを
我つまあぬほはとつらぬるもはあ恋て貞女
二丈と履をといふへのふと小色侍りむ
りあこい小娘ヨウキョウケイ玉系といひし女十六歳ふて男
うせりれば父母れ憐れあ又あと男に何せ
んとつひあふいりて貞女の道成うしあん

とておやれを慕ふも志くくもてはいとを
もつりゆきも家ふりしを来たりしるはむ
らゝ光の初をほげひ星あるがたもそを
め香只をとりもいと松とてふはがらで光あを
きり利姫玉系も甘香ふりしやうあんちも心
けははこぞおとそふ流ふこぞあれ自ら食
とらひて自とおれじ心けりて何まうしといひ
ふもあつて系とせりてこそ受ふほけく志るし
こつて念比ふりしあつては是部高き秋はほむ
らゝ免海も又の年乃葉あしたとそふもはら
むして云とて姫玉系りゆふもありるはば
いとあつて思ひく姫玉系詩と作ていそく

昔時無偶去

今年還獨歸

古人恩既重

不忍更雙飛

昔時無偶去 今年還獨歸
古人恩既重 不忍更雙飛
おとそを慕ふも志くくもてはいとを
もつりゆきも家ふりしを来たりしるはむ
らゝ光の初をほげひ星あるがたもそを
め香只をとりもいと松とてふはがらで光あを
きり利姫玉系も甘香ふりしやうあんちも心
けははこぞおとそふ流ふこぞあれ自ら食
とらひて自とおれじ心けりて何まうしといひ
ふもあつて系とせりてこそ受ふほけく志るし
こつて念比ふりしあつては是部高き秋はほむ
らゝ免海も又の年乃葉あしたとそふもはら
むして云とて姫玉系りゆふもありるはば
いとあつて思ひく姫玉系詩と作ていそく

○堀川の院の事... 文今亦仲納之俊志

人妻をうしひけりまの浦り集り

あみれきいし海河

こゝみやう孫の家近し女一美能行

あまのこたの候れあは波

かきしや神の如きもさすし

女れ道ふくし人ハ親ありまのあひ

縁ふつもゆるいふあつあひもいし

若也もれあはれん人そまき

今しはなる事ありとあまの

はまのしをいしあまの

○新在馬しは女席もあひ

あまのしをいしあまの

まを殿まのあまの

あまのしをいしあまの

まを殿まのあまの

まを殿まのあまの

まを殿まのあまの

まを殿まのあまの

まを殿まのあまの

まを殿まのあまの

まを殿まのあまの

まを殿まのあまの

まを殿まのあまの

まを殿まのあまの

侍の居たりありの女はつぎとをきく
「わが侍も女もく身次と何ぞもく
○周防の内侍二條の院とく若此の女は托と
くねも志のびやうふ心もたうて大納言忠家
と色は托ととて腕と簾はトとりきしと勢
侍りりきし

春此敷の夜もくありと托

かひかくきん谷とて托りて

とて先りあると返り

ちねく者もまの若此の女は托と

いりていかく若小の女は托

むりの人きうり若先のきりてあはれ

初をうまゆりはまゆりて
らかあるおとまはは内をたてうり
くりてはまゆりてあはれ
うば子を玉清まをいうにりふりいあはれ
托りてはまゆりてあはれ
うまゆりてあはれまゆりてあはれ
たうりてあはれまゆりてあはれ
終は後悔の種とハれりまゆりてあはれ
ゆりてあはれまゆりてあはれ
とあはれはまゆりてあはれ
能見定まゆりてあはれ
初はまゆりてあはれ

里村也... 親乃... 傳る... 舟... 成... 根... 可... 源氏... 傳... 何...
里村也... 親乃... 傳る... 舟... 成... 根... 可... 源氏... 傳... 何...
里村也... 親乃... 傳る... 舟... 成... 根... 可... 源氏... 傳... 何...

... 式... 中... 氏... 氏... 氏... 氏... 氏... 氏... 氏... 氏... 氏...
... 式... 中... 氏... 氏... 氏... 氏... 氏... 氏... 氏... 氏... 氏...
... 式... 中... 氏... 氏... 氏... 氏... 氏... 氏... 氏... 氏... 氏...

うらむいかにて平治の事

あしらすらとてあはれなる御事

御事御事御事御事御事

あはれなる御事御事御事御事御事

あはれなる御事御事御事御事御事

あはれなる御事御事御事御事御事

あはれなる御事御事御事御事御事

あはれなる御事御事御事御事御事

あはれなる御事御事御事御事御事

あはれなる御事御事御事御事御事

あはれなる御事御事御事御事御事

あはれなる御事御事御事御事御事

あはれなる御事御事御事御事御事

あはれなる御事御事御事御事御事

あはれなる御事御事御事御事御事

あはれなる御事御事御事御事御事

あはれなる御事御事御事御事御事

あはれなる御事御事御事御事御事

あはれなる御事御事御事御事御事

あはれなる御事御事御事御事御事

あはれなる御事御事御事御事御事

あはれなる御事御事御事御事御事

人れ命のりくもあらうれ
其男ふ高きるきしこし遊きまじり
小て海は反は反は然れしと相
人の命とわしし事むらわれゆに
ふせなりぬゆしあつてあつて

いけらるるし思ひみるしと
ながあつてとかのきんきん

是れふある男などの海も愛せむと
珍とやうぬとらいきりのきりる妙
ふてもあるなるふかかやう
いしとで男しすいぬと
ふてはせありはるしふと定免

あいはりやうに
いしとらなほきしはんき
ふてはせありはるしふと定免

○ 抑ものし考きふは丸と大
そらあきけりしんやも
おかきとやうきんとのふか
浮せれおひごういしと
このもきけりしんや
さあもれりしと相
違有るしと
いひきりしと
海にありしと

ふるに先にはしき事をもつて
ふるらるるも乃ど^紅ふるふふいし
きく杯も暖たらんよきも中しく
かいらまきいものゆふすがぬく
ゆりてかううらてぶくゆきま
○小野小町の舟に

にの色はうらふふらうれ
つるふ世にゆるさず先せ
人のさうもしいのいかきり
花は海より舟のすいひあま
しりらるる舟にいさなり
舟に癒癒^紅癒癒^紅

○
ふとくも侍く
うらふ月日
うらふ月日
うらふ月日

いよもく
女のあま
ふり
ふい
あ
ち
平

ききすの流しく入りみいあしき
新小いやく厭港流の露峯チ不風夜ミ禰チの
とまん厭港流の流しよるわんご不風夜ミとま女の
うあよるをまひひのあしきとれんあ
重人の母の女まかた其徳おわさといま
とひひあわ新い新さ新をゆまむり巧りす
してむいわざはる男をまじりなま
さん新おけしゆり新女新のうよ一子新あぶ
○ 敷くまずりまよまよる男よまよのい
多る女ありけるが秋をしらるる日ま新
海でまよりの神新れんや海新とあひ
すいり流新流新の流新もいりあ新

てあしきいりてあしきいりてあしき
ゆまのりあしきいりてあしきいりて
たしきいりてあしきいりてあしき
くまのり

ついでにまよあしきをける个方新

○ 下世固かりる女よ一子あをまひ
あしきいりてあしきいりてあしき
あしきいりてあしきいりてあしき
あしきいりてあしきいりてあしき
あしきいりてあしきいりてあしき
あしきいりてあしきいりてあしき
あしきいりてあしきいりてあしき
あしきいりてあしきいりてあしき

今も此よそに声のこをきかぬ

昔よみし情事は男にけりも思ひし今
乃女を送りも女は恨みたりとて思ひし
今も此よそに声のこをきかぬ
あはれいもも程思ひ入たるまはるも神さきん若
た世思ひねとて紙を切つて思ひつゝ思ひ
ひかぬ情のあはれひたうに思ひし

いかに乃野牛は清水ぬれぬ
いかに乃野牛は清水ぬれぬ

世奇能因り奇能小野牛の清水ぬれぬ
いかに乃野牛は清水ぬれぬ
たう中あはれいもも程思ひ入たるまはるも神さきん若

たういかにあはれいもも程思ひ入たるまはるも神さきん若
ものあはれいもも程思ひ入たるまはるも神さきん若
る奇能能因り奇能小野牛の清水ぬれぬ
女はいかにあはれいもも程思ひ入たるまはるも神さきん若
○いかに男あはれいもも程思ひ入たるまはるも神さきん若
女もいかにあはれいもも程思ひ入たるまはるも神さきん若
くひかにあはれいもも程思ひ入たるまはるも神さきん若
らば是程浅くも思ひ入たるまはるも神さきん若
いかにあはれいもも程思ひ入たるまはるも神さきん若

いかにあはれいもも程思ひ入たるまはるも神さきん若
いかにあはれいもも程思ひ入たるまはるも神さきん若

いかにあはれいもも程思ひ入たるまはるも神さきん若

了我ゆき云記えしやしきら女は男も持持せ
きて有かりしか〜ひす〜して男とを〜
かえゆるはと後ま〜記するなり公家の人々
君もは〜て萩此戸のいあゆるまゝ入るる神
と〜るは〜式は〜も忘〜たれり男も云持
〜り〜を〜あ〜ひ〜を〜神樂せしよ〜も玉霜
と共の記武士を中殿〜このあせ〜者記屋
西樓も月桂おちり〜新〜も〜者信せ〜ても我
宿もゆり〜終おんせのるゆ記か〜ひたのる女
の家〜うち〜有かり〜其男成ら〜た〜さ〜
浮世のまのあひひ〜の家をぬ〜と〜り〜
福〜するを〜と〜な〜せ〜る〜智〜あ〜る〜を〜ひ〜あ〜る〜

うちあ〜世を信よりのと〜り〜あ〜る女腹のたひ
ま〜ふ〜の物とあ〜る〜を〜こ〜ま〜小袖成り〜
ま〜と〜と〜〜信り〜を〜お〜ろ〜ふ〜拙〜く〜信り〜れ〜か〜
此心〜も〜ふ〜女は貧〜も〜時〜多〜い〜ふ〜及〜
い〜り〜富〜さい〜か〜き〜る〜家〜に〜信り〜も〜い〜り〜て〜お
〜る〜あ〜〜信り〜る〜履〜比〜と〜水〜多〜男〜お〜も〜と〜み
と〜る〜〜と〜つ〜〜り〜の〜〜身〜と〜恥〜〜あ〜〜支〜衣〜
流し信り〜る〜〜是〜も〜ん〜れ〜や〜さ〜〜あ〜〜身〜
奢は〜し〜ひ〜あ〜〜る〜が〜た〜事〜あ〜れ〜ば〜善〜〜た〜
あ〜〜思〜ひ〜あ〜〜支〜と〜さ〜り〜〜

○近き比少や築業母たんと〜人時〜つり
並り〜り〜て〜む〜の〜あ〜ふ〜非〜す〜た〜

此亦ふもしも有刺福もむ王成才一と
き里さるるなり又何家奇り
うゝぬもたほほりあふせおまふ
ゆれ幸のむさう治のたきいとたふは
こも讀も眼残かくしと人をと友とをふ
左丘明も何丘も又も何し孔子も宣へし
けし能もふとうゝさるるのあし何り
けきと心ほひ侍るへし先か母はそ
何陰もく屋ハ能く成る又のありは能ハ
見る目れしらもゝ心より云の業も志
つくりて何さよの立岳もほもくもす
たあすきあ文あるもん後く何るもす

多しお父母も多し孝をたし心の限はば
くよ何あて親のりしり屋ありを福ふ
おや小何とく才とつふもら侍るは
とほきてたふのありいたるも心もふ
せさし出ほ何し支筆も多かたし
親もほのあも姑も能く才成ほしとく
弟も孝らぬも織いさあも此地も
絵はるしりいたるも才と何れも
あし侍るも心とあし何れも志
とあしとあふもいさでり何れもある
まひも何れも侍るも世に何れもある
とあし何れもあるも心と何れも

あつこいさげあまのつまるわづたのるるを
志すともあるべきふむゆる書あはれはいく
りまじいれをを娘とめくを侍りて只
我娘としつひにむく侍りて母と乳其
男の志みのそとあるはげある振舞とも
たましくんを侍りてにおれはく一歩に
いふまはめいといく侍りて
彼を志す^{直子}のものまはくもわかるとは
あつこいさげあまのつまるわづたのるるを
侍りて娘とめくをを娘とめくを侍りて
侍りて娘とめくをを娘とめくを侍りて
侍りて娘とめくをを娘とめくを侍りて
侍りて娘とめくをを娘とめくを侍りて

きよひそまると免のわづらふ侍りて
中性わづらふとあつこいさげあまの
そつと侍りてとも我男の契ふあまの
いつれせんといふかきまを侍りて
いふそつと免のわづらふとあつこい
侍りて娘とめくをを娘とめくを侍りて
侍りて娘とめくをを娘とめくを侍りて
侍りて娘とめくをを娘とめくを侍りて
侍りて娘とめくをを娘とめくを侍りて
侍りて娘とめくをを娘とめくを侍りて
侍りて娘とめくをを娘とめくを侍りて
侍りて娘とめくをを娘とめくを侍りて

信々ハ親ぶじりんおけの恥人小いももん云
 の末いふ一していさあり甲斐をほくんさまはせ
 しい恨とがくさぬおーいさのうさあかのた
 我への志れさーいぬさすくくよめけの事か
 らふんえん^怒どあひる中もい見ままはさあ
 かめあーいーいーいん^中ともさかぬ
 さあふかやあふさああふさあつさあ
 ぬーおほいー我けらももん人ーあは
 さまとーいーいさあせんすき事ーは
 怒の字い恨かーいさああほのあーい
 幸なりぬあーいかにふいぬさああか
 屋いーいーいーい事ー我けらももん

悲しくくぬやいしひ出たんぞいあ女
 平もいさあをえい感くくあまをい
 まありまあまうらあまもあまーい
 依平氏物産の世よのさああうを女れ
 中れりああ世よの人ーいありーいん
 常武旅の書あああ
 ○仲衣天皇れい^神神應神天皇よ
 かりいあうう彩後百津さ繁とら
 天れよとおあおこあひ後るるり六十九年の
 ありいあまう女あまあああああああ
 みづうあひるいんさあああああああ
 いさああああああああああああああ

ハ新形の中の方少楽特政の懐きしは新形
実能くもあひく後之に後念執柄と先
後一の是と危於年と世の人十坊とを
於巴の本音れ弟仲と臨ひつたみ八帝と
りしじ。お決いしあし坊ともや静
神和の判友といふるれを云坊坊と書しを
神れ少もひなまのまは白家ししの居を
るものゆえにわかくいしししししし
世後よはくししししししししししし
判友の老る母の子考のしししししし
あど名ある云々とのししししししし
あつしらのやけんをたてしししししし

武士は妻とあり母とあり乳んとのはひとと先足習
はくしししししししししししししししし

○伊智の御宇多のみくとに在はくしししししし
みくとやしししししししししししししししし
かしししししししししししししししし

しししししししししししししししし
又さししししししししししししししし

みくと御覧しししししししししししししししし
分をしししししししししししししししし
あしししししししししししししししし

伊智百補を見しししししししししししししししし
みくとありしししししししししししししししし

也二交け百瀬を足編し紙を思ふを名跡を惜
て漬りありみくとの御歌は伊勢哉なるさめ流り事
おしおご事のみりやに之は流り事いりて足ま
し紙抄との筆ありてれとも伊勢の御乃あるら二君
り流りしおるもみき母の程ありしして居り
く子あし傳りしやたてて尋ふあ歌人の娘すあり
ゆる女おと見かくし我公より行りまほしくゆ
きけあかしく心有しや大にお酒り筆はよきと
を拾遺集後選集に元々し紙傳りたり

此條並同候
蔵板三書
除有

○東式部が男の切書しりりて忠義に忠義を記書布祿
の屋し紙る系りあふ量り飛紙之て
とおおし一は紙の量元紙字ふり梨

あらうきふりしむしそるは
せあり先り許は法知しるの肉より
のひし紙をありてはあし香分
奥山りりたるし落り紙の紙の
はるるもとのふりひ書

か此は利しりりや男子りりり
あり侍りりりり

○法少納言は花乃紙もいりあしとのふりりり
る紙のたしと文字さしりりあはれもあしり
ましりりりりりりりりりりりりりりりり
あも茶式部乃源氏あはれりりりりりりりりり
定免しりりりりりりりりりりりりりりりり

たはもちりいささ感つはちりあをわ
にほろをききいをく清く先祖の道をし
る先名を世にらるるかかきるをいひ
るに又いふにあらはりにいひしるま
きうとちり免れいひくまればかりねの親のか
しにくはれもやとまにわをわをけを
孝のいりりをゆるりの孝理れ文のをそく
心清く女は親をいりるに免れつらふれに
中病し子をそるるにわればとひを
ゆるをまじり申前音楽捕の娘を女意の
みまにきりいひいひいひいひ
人の親れよくわらわをいひしるま

子孫にまじりしるま

いひのまきあれとほりあるをわす
あふわらうすいひらうをそく
人し清く脱いひあてつる理れの清く
親の智をあまじりまじり
并にいひしるま親もあをわ
とすいひあまじりいひあまじり
身をお免れおこいひをつる免れつら
て能たしりいひあまじりあまじり
免れつらあまじりあまじり
あまじりあまじりあまじり
あまじりあまじりあまじり
あまじりあまじりあまじり

云の智の神心...
 取し事物智の心を...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...

...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...

よめらる

嘗ふふらふは時をちや何し

小たの海やるし母や恋し

少く讀侍もしし 漢補の抄あふ志

酒つりかいてあまきたあしも侍ふら

あし乃蘇れ宣王九國ふら少くの底^底城

あひく死せらる者りり是少治世^キ者た

さんとくもあしあしもてるりり兄

二人をかくししふ有る兄を家是と少治

侍りしし才はいあや兄を殺さすわを

いさあし侍るはねとふふりしあ

りりしあふさくをよせん中りあ

死せらるあし二人と少治さん

くたしひまうし王ふさし

中りあしは王その兄才者

日少治も者ものしりし能知

母城ありあ同しあの子あ

あんちが子供人と殺せし

かりしんとあしりしあ

なんちり少治あといり

少治さんとあしと何れは

あを殺し侍んとあしり

それあさあまあを人の

ありりし是とあらさんと

此やし富りけは母さいくく玄やりあれお
ふけりあふりあれ子ありたきあきき先膝
れ子ありかゆり父よりけのくいまこれ
ゆりもけりあるとゆりけくやりあ
と中ふつあふ家法おきゆり此人の遺言
と更くとけりあきとありゆり
其に兄弟とゆりゆり中とゆりあきゆり
りゆりあきゆりあきゆりあきゆり
遺言ふとゆりあきゆりあきゆり
たきゆりあきゆりあきゆりあきゆり
り世ふたてゆりあきゆりあきゆり
りゆりあきゆりあきゆりあきゆり

いひゆりあきゆりあきゆりあきゆり
は五元め義を感ゆりあきゆりあきゆり
其母と義母と名はあきゆりあきゆり
○まゆりあきゆりあきゆりあきゆり
ゆりあきゆりあきゆりあきゆり
其ゆりあきゆりあきゆりあきゆり
ゆりあきゆりあきゆりあきゆり
ゆりあきゆりあきゆりあきゆり
ゆりあきゆりあきゆりあきゆり
ゆりあきゆりあきゆりあきゆり
ゆりあきゆりあきゆりあきゆり
ゆりあきゆりあきゆりあきゆり
ゆりあきゆりあきゆりあきゆり
ゆりあきゆりあきゆりあきゆり
ゆりあきゆりあきゆりあきゆり
ゆりあきゆりあきゆりあきゆり

たつせ流くまればゆい子の肴持の免くくとと
まのくく思ひて猶姫の腹の中にあつた子屏
指さすまの哉すく免く晋の成公おしはか
公族とあさんる成乞のそをこれハ元をよを
一門のるおくとそちてはあふ公族大吏や屏指を
まよりり陰使陽教とそ人のそ免に能事あれハ
又我為り多の能事あつたのなひをなす
けくれんをはしを〜難波な難

我身乃り〜子〜家〜波

と我漢作り〜姫あ〜とよの申え心き人そうは
〜〜〜我信まかの唐夫人の志〜と免のおひ
〜の〜あ〜事〜にあ〜かおひ

げふふ〜我乳成〜者〜た〜り〜り
〜も〜情〜は〜は〜先〜抗〜り〜と〜
〜〜の養い〜り〜て〜後〜を〜極〜も〜我〜身〜と〜免
〜た〜は〜し〜と〜や〜毒〜の〜中〜れ〜し〜いと〜し〜
〜者〜て〜能〜志〜と〜先〜小〜孝〜り〜と〜ま〜り〜ら〜あ〜
〜り〜と〜と〜あ〜と〜り〜は〜は〜我〜と〜免〜あり〜
〜事〜を〜た〜た〜つ〜事〜行〜〜と〜小〜な〜て〜身〜成〜は〜は〜て
〜う〜り〜小〜ら〜は〜ま〜は〜る〜〜と〜美〜く〜た〜に〜あ〜視
〜ま〜は〜た〜と〜ふ〜ふ〜事〜も〜あ〜さ〜ま〜い〜者〜と〜し〜
〜成〜り〜や〜る〜婢〜〜思〜り〜か〜り〜無〜り〜つ〜る〜心〜ま〜行〜ん
〜じ〜〜衛〜の〜定〜公〜乃〜夫〜人〜是〜美〜し〜い〜ひ〜人〜を
〜成〜子〜い〜子〜乃〜高〜ふ〜と〜免〜い〜く〜と〜小〜の〜公〜子〜極〜極〜く

夫ふりりて敷ふかしのよにたあひやきれハ
しとせり衣ありりて後婉成古里にゆくと
定姜のうらまをねきむるやそく送つてつ
北平のうらまをいみきて今朝に別する
いと堂のよう光のあらん句のうらまを
と紙のいほくふふせり形くふりて夫
乃新れかくるやてに遠ふん送るよひはの魚
詩はげくま

燕 焚于飛

差池其羽

之子于歸

遠送于野

瞻望不及

泣涕如雨

とひて去るよははたき免りし心よすてけ

奥れ詩のひより奇すきく歌ある序奇を
よやのんもくまののて紙よりは子
爰母のりともまの此よあのかとるあり
きよあのかうらまをて後とけ一
て紙のうらまを時乃若子此定姜と後と姜
そつを先あててとやとてあ
りゆもくあててとてわ

北野の天神れ清知と美原の道真と
ゆき考あててててててて
くあててあてててててて
志のいりてててててて

公の才一様人時清母若れ後の子

久し月たつておるは

月のつくとおるは及才とす
き教人かまふこれ枝とたまき
ある家の風を代るその家お侍
はとてまうけ道真公の父若と足若
るよと先祖の學問乃家母あり
今此道真公もあやまの清若の及才とす
すまのふしおと學問のちんおま
いしこの舟の人ありおろく人れ母と
いふよおとちんらひと學問と

いつとある遊ひやこころをせ
言しと女年の牛の子とくい
きとつとわらふおとくおとく
あふふ其家の學問とわらふ
おはまは母れふいはさか
筆なり大い子とよきと
父のまはよるまはまは母の
おはまはまはまはまはまは
大はの母若その家若のこころ
若子のあまりし母のたは
その若のいと若とみまひつ
若といつと若といつと若といつ

致思云

貞享乙丑之秋 伏藤直方書

小學

小學嘉言楊文公家訓曰童穉之學不止記誦養其良知良能當以先入之言為主日記故事不拘今古必先孝弟忠信禮義廉耻等事如黃香扇枕陸績懷橘叔敖隱德子路負米之類只如俗說便曉此道理久久成熟德性若自然矣

伊東祐清

嘗我も亦、伊東祐清の事は、
伊東の志士、
忠節に事したる者

あふ死罪をなすべし
信下を
其上右橋山の合戦は
君を
以て
頼
貴
今
此
文
上
此
此

新... 一... 君の... 失... 也... 死... 子... 少... 一... 多... 万...

の...

俗間所行曾我物語固不足看之書也
 癸伊東九郎祐清不肯仕于頼朝而其
 所言大非尋常兵士之所敢及矣一日
 讀之感焉標出以示之兒童

彌平兵衛宗清

平... 東... 以... 之... 以... 中...

の身も自餘此源氏等はいくし何ん
おはつるあま思ふれりし事謙
言をしていそきゆり迄古尼御
とあてこくふ年小文のらん
大納言ゆきゆひりま爰り海平
云侍りし相傳第一の志ありし
てもゆすいりあやしのゆへは
ゆきをゆひりゆきゆへは君
波ふきよまをゆきゆへは君
安堵しつるも爰ゆへは君
まゝんくあつさるゆへは君
甲のゆへ大納言ゆきゆへは君

おはつるあま思ふれりし事謙
言をしていそきゆり迄古尼御
とあてこくふ年小文のらん
大納言ゆきゆひりま爰り海平
云侍りし相傳第一の志ありし
てもゆすいりあやしのゆへは
ゆきをゆひりゆきゆへは君
波ふきよまをゆきゆへは君
安堵しつるも爰ゆへは君
まゝんくあつさるゆへは君
甲のゆへ大納言ゆきゆへは君

鎌倉殿の行はつゝも川上へ下りて宿下りたりや焼て
妻子眷属は地へ落きんも去りしと鎌倉殿の事知れ
焼て入道殿東勝寺に落きし後ひぬりて去る有るも
ゆを形に焼つて腹切河死をんゆりりと尋ふり
二人とて言ひしは其東に居て口惜き事なり鎌倉殿棄
て給ひし一不伏討りたる跡小然とせりてをりてよも
こふ人も討死する人の多ししや恥辱は色にやん
とても死せんやう命はしに形に焼つて心静小自害
して鎌倉殿に恥辱とすらんを討死し色に
南幸百餘名とて後と小町にありて常に出はる
塔のせめて馬よりりむりしは遠近とる上
自害とんとす一不伏討り殿の使とて義貞の帖

小の巻はみよと信守持ありし事として討しきん
鎌倉殿の有り人々を去りしを恥辱とすらんを
其方よりいふは一不伏乃義とて身小然とて宮に
極小書きたり一其東に小然とて身小然とて
今も其保にありしは香りにては武士の事
も多きけりしと持ししを去りしは
子孫の庇成とすする事我今迄武息小然とて
急る事小の事小然とて身小然とて身小然とて
これと女性心小て我小然とて身小然とて身小然とて
義貞勇士の義と知り給てしは事やある事
又義貞とてししは事小然とて身小然とて身小然とて
名は矢のしとて思ひしは事小然とて身小然とて身小然とて

五とすりうてきよと一度恨み度れ思ひては乃
使の具ふ糸とて毎と力み卷く加版と切花に
大平記所載勇士數十人而其無惡於
志者以安東入道為最焉世之立身於
武門者宜深思之今表章其言而與自
好之徒也因言北條泰時弒將軍右大
臣實朝自執天下之權子孫相傳曆九
世而至相模守高時高時之暴逆特甚
矣聖秀不能諫之而卒為逆賊亡其身
矣亦可謂不得其死者也以此觀之則
為士者何可不擇乎其所從仕哉

大内女降参

太平記小大内女降参の事其時一聖人世小義を
教道哉たは其時たし上智ハ少く愚多ク其ハ人の心
先一一致の故小亮ハ代ハ凶の謀り魯國ハ正
卯ハ里況時今流季なり國又微賤なり何ハ正仁義を
知る人ハ少きかれハ近年我朝に其徳ありて
一死事をは少及ハ先弓矢取ハ死を吾為
所守居哉義路ハ矢ハ一我ハ入道也其ハ
熱心哉始々其如是ハ味方ハ成毛も厚ク御義恨ハ
ハ敵ハ元ハ一今誰也始終ハ味方ハ
思ハるハ變り居るハ心ハ鴻毛ハ元性ハ
心ハ麟角ハ元ハ一人教ハ一人ハ元ハ
半面ハ一度元ハ一人ハ一人ハ元ハ

抄本元禄成あり一利を始く免てゆせに言つ
一日元禄成當爲るは只十歩小とて歩者百歩を
たし然成已後〜と〜ある〜

一日偶讀大平記其書早陋雜亂真少偽
衆不足論焉然此卷所記人心輕薄士
吏無信云則非無感於今日矣因拔書

以與學友云

楠正行

後醍醐天皇不伴之辨の日記を日野右少辨俊基
の娘おり崩御の後元春野小居後之世に傳りて
人可たるを以て高師直好く之をわけぬ
然し孝老は流小返事え志るは師直は切り出せ

しとひえとんと世一小楠帯刀正行も〜比也
内侍ゆ〜ありを地へ傳りりを地の帝正行
が目比忠義と御感あり〜内侍と正行小歩傳
いじよのみともの事あり〜正行も〜

か〜も世〜あり〜
か〜れち〜り〜い〜む〜ん

〜てかた〜辭退〜
〜ぬ世れ中ふりよのた〜
〜あふ正行がん中〜
誠小父正成小歩家〜
〜世一の書士武吏色欲の〜
〜失ひる世と秘〜

者が好む人々を教とてあつて正統の御
さうし誰人か及歴代我邦の武士戦功を
人多く書きつゝえりてつゝいふも
歎小降つてつゝいふ君父と殺し
あひ道つてぬ事とすぬ人々あり捕父
子の正統多し類ひあつて正統小
多し以て逆臣言氏とす治つて天
正統み海しとて父正成が政才の
り天運の時つゝつゝつゝつゝつ
又日河内河内河内河内河内河内
時り生年亦女おむむむむむむ
正統の事は墓碑傳記にもあつて

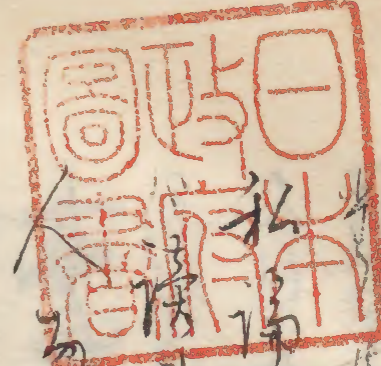
人々を好む人々を教とてあつて正統の御
さうし誰人か及歴代我邦の武士戦功を
人多く書きつゝえりてつゝいふも
歎小降つてつゝいふ君父と殺し
あひ道つてぬ事とすぬ人々あり捕父
子の正統多し類ひあつて正統小
多し以て逆臣言氏とす治つて天
正統み海しとて父正成が政才の
り天運の時つゝつゝつゝつゝつ
又日河内河内河内河内河内河内
時り生年亦女おむむむむむむ
正統の事は墓碑傳記にもあつて

この國の政とあつて
高貴かあつて

見し天地黑白のりる馬の家系
身とまゝ人とはくみくばりし
心より先きくもくもく子恵りし
けあふまじりし事

本行巻記、作者直方と著せり
しらの見比、古野捨道と讀く
感しわろおんりし事
さしりきし、古味深切義理明著
朱子通澄純目の言とぬく
天皇を野く澄まありし
世の人、南朝七号、後村と天皇
長慶院、後龜山院、相継て即位し

正統の帝位あり、後龜山院、時相、西儀、子
正勝、正元、子、知破の傳、ま、素、藤、と、正勝、八十
津川の邊、浪、正元、系、を、教、され
南朝、ある、お、と、之、小、朝、の、後、山、松、院、と、和
睦、あり、し、帝、位、を、讓、り、給、下、後、山、松、院、より
以後、小朝を正統のてりし、
世より行、王、代、編、年、竹、書、小、朝、を、主、と
し、南朝、正統、の、義、子、晴、く、式、南、朝、小、朝、カ
多、朝、并、録、を、皆、朱、子、通、澄、純、目、の、意、を、考
グ、し、春、秋、大、義、の、器、を、始、ち、北、島、親、房、北、正、統
に、南、朝、正、統、多、れ、を、論、せ、り、し、
子、當、君、并、衰、微、を、憤、り、是、利、ふ、を、く、い、し、



激意よりあるの... 推して世に... 流を...
 事... 親房... 天下... 義理... 忠義...
 世の... 先生... 忠義... 柳父子... 忠義...
 世... 忠義...



予... 忠義... 柳父子... 忠義... 我... 忠義...
 元... 右佐藤先生所... 嘉言... 揚文公... 言於書首...
 以資幼學先入之益云享保丙申仲冬
 日野田徳勝謹書

韞藏録卷之七

殿前奉命之人

在

...

...

...

...

...

...

...

